

(科目コード：8908220097AE)

【改訂】第7版(2018-09-27)

【科目】生物学特論

【科目分類】 専門科目 【選択・必修の別】 選択 【学期・単位数】 後期・2単位

【対象学科・専攻】 環境 1・2年

【担当教員】 大岡 久子

【授業目標】

生物が有する機能を有効に利用する手段，問題点などを説明できる．
バイオリアクターやバイオセパレーションについて説明できる．
酵素や微生物の特性と工学的利用について説明できる．
細胞培養技術や植物育種について説明できる．

【教育方針・授業概要】

本科目の総授業時間数は22.5時間である。
酵素，バイオリアクター，バイオセパレーション，生物プロセスの計測と制御などに関する理解を通じて，技術的課題に対応する能力を修得する．
酵素反応，微生物反応などの利用方法や問題点などを理解する．
細胞工学の応用について理解する．

【教科書・教材・参考書等】

参考書：生物化学工学：海野肇ほか著：講談社サイエンティフィック
参考書：酵素 - 科学と工学 - ：堀越弘毅ほか著：講談社サイエンティフィック
参考書：バイオプロセス工学：海野肇ほか著：講談社サイエンティフィック
参考書：バイオケミカルエンジニアリング：佐田栄三・砂本順三編：丸善
教科書は特に指定しないが，上記の参考書をもとに授業を進める．
適宜プリントを配布する．

【授業形式・視聴覚・機器等の活用】

教室での講義

【メッセージ】

分からないことは質問すること。

【事前に行う準備学習】

準備学習：生化学，微生物学，細胞工学，遺伝子工学の基礎を習得しておく事が望ましい。

【成績評価方法】

[後期]中間試験：40%，期末試験：40%，レポート：20%

【達成目標】

	達成目標	割合	評価方法
1	生体触媒，固定化生体触媒について理解する．	20 %	定期試験，レポート，小テストなどによって評価する．
2	プロテインエンジニアリングについて理解する．	20 %	定期試験，レポート，小テストなどによって評価する．
3	微生物などの生物利用について理解する．	20 %	定期試験，レポート，小テストなどによって評価する．
4	反応器としてのバイオリアクターやバイオセパレーションの方法について理解する．	20 %	定期試験，レポート，小テストなどによって評価する．
5	細胞培養技術の利用や植物バイオテクノロジーについて理解する．	20 %	定期試験，レポート，小テストなどによって評価する．

【本校の学習・教育目標】

- (C) 技術的問題解決のための専門分野の知識を身に付ける
各専攻分野における専門科目を総合的に学習することにより、技術的課題が解決できる

【授業計画】（生物工学特論）

回数	授業の主題	内容	レポート	宿題
第1回	生物工学とは	生物工学とは 化学工学の基礎 生化学の基礎	授業内容についての課題	課題
第2-3回	酵素の利用	酵素の概要と特徴（反応性，特異性，反応速度，阻害剤など） 酵素の固定化（担体結合法，架橋法，包括法） 酵素の大量調製	授業内容についての課題	課題
第4-5回	プロテインエンジニアリング	タンパク質の人工合成とデザイン	授業内容についての課題	課題
第6-7回	微生物などの利用	微生物の特性 微生物における反応速度論 微生物の利用		
第8回	中間試験	これまでの授業内容の確認試験	授業内容についての課題	課題
第9-12回	バイオリアクター バイオセパレーション	反応器，培養槽としてのバイオリアクター バイオリアクターの設計 微生物バイオリアクターの設計生体中の様々な生合成産物から着目している成分を取り出すための単位操作	授業内容についての課題	課題
第13-15回	生物工学の応用	細胞工学の利用など 細胞培養技術の利用 植物細胞工学と植物育種	授業内容についての課題	課題